



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（１）：第三世界との出会い
Author(s)	水溜, 真由美
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 144, 73(右)-104(右)
Issue Date	2014-11-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57478
Type	departmental bulletin paper
File Information	144_03_mizutamari.pdf



堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（1）

— 第三世界との出会い

水 溜 真由美

一 はじめに

堀田善衛（一九一八—一九九八年）は、日本近代文学史上屈指のコスモポリタンの作家である。堀田は、海外の歴史や文化について該博な知識を持ち、生涯にわたって異国あるいは異国の人物をモチーフとする小説、紀行文、評論、エッセイ等を多数発表した。^① 西洋文化が教養の中心を形成していた世代にあって、とりわけ堀田に特徴的な点は、アジア・アフリカ諸国（第三世界）との深い関わりである。

堀田の第三世界との関わりは、敗戦前後の中国体験に始まる。堀田は一九四五年三月一〇日の東京大空襲の後に上海に渡り、一九四六年末まで上海で暮らした。帰国後一九五〇年代前半にかけて、堀田は上海における体験をベース

堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（1）

にした作品を多数発表した。また堀田は、帰国後も何度か中国を訪問し、『上海にて』（一九五九年）などの紀行文も発表している。

だが、堀田の第三世界との関わりは中国に限定されない。堀田は、一九五六年末から翌年初めにかけて、第一回アジア作家会議に参加するためニューデリー（インド）に一ヶ月以上滞在した。以後アジア作家会議は、アフリカの作家の参加によりアジア・アフリカ作家会議と名称を変えて活動を展開するが、堀田は、日本代表として大会や常設事務局会議などに何度も参加した。さらに堀田は、アジア・アフリカ作家会議の日本支部ともいうべきアジア・アフリカ作家会議日本協議会や日本アジア・アフリカ作家会議においても、長く中心的な役割を果たした。

アジア・アフリカ作家会議は堀田の第三世界との関わりにおいて中核的な位置を占め、堀田の思想、作品に大きな影響を与えた。本稿では、堀田とアジア・アフリカ作家会議の関わりを明らかにしつつ、堀田が第三世界をどのように理解し、また思想化したのかを検討したい。さらに、堀田と第三世界とのユニークな関わりが、同時代の日本社会や日本と第三世界との交流史において、どのような意味を持つのかについても考察したい。なお、堀田と中国との関わりについては、敗戦前後における中国体験が決定的に重要な意味を持つため本稿では詳しく論じない。中国については、アジア・アフリカ作家会議や第三世界の国々と関わる範囲で記述する。

二 アジア・アフリカ作家会議とは何か

アジア・アフリカ作家会議とは、反帝国主義・反植民地主義を基調とした、アジア・アフリカ諸国の作家を担い手

とする交流・連帯運動である。^② その端緒は、一九五六年一月二三日から二九日にかけてニューデリーで開催された第一回アジア作家会議である。

一九五六年にアジア作家会議が開催された背景は以下のようなものである。アジア・アフリカの各地における民族独立闘争の結果、第二次大戦後、かつての被支配民族が次々と独立国家を形成した。一九五五年四月、帝国主義の支配下から独立を勝ち取った新興国を中心に、二九カ国の代表がインドネシアのバンドンに集い、アジア・アフリカ会議を開催した。^③ アジア・アフリカ会議は、反帝国主義・反植民地主義の立場に立つ第三世界の存在を国際社会に強く印象づけ、ほぼ同時期にニューデリーで開催されたアジア諸国民会議と並んで、第三世界の連帯運動が活発化する契機となった。^④ アジア・アフリカ作家会議は、文学の領域における第三世界の連帯運動として位置づけられる。

インドの呼びかけで開催された第一回アジア作家会議には、ビルマ、セイロン、中国、北朝鮮、モンゴル、ネパール、パキスタン、シリア、イラン、エジプト、ソ連、ベトナム民主共和国、インド、日本の一五カ国から一五〇名の代表が参加した。^⑤ 続く第二回会議は、アフリカの作家が加わり、第一回アジア・アフリカ作家会議（以下、第一回大会）として、一九五八年一〇月七日から一三日までタシケント（ソ連・ウズベク共和国）で開催された。なお第一回大会において、カメルーン、セイロン、中国、ガーナ、インドネシア、スーダン、インド、ソ連、アラブ連合、日本の一〇カ国の理事国が構成する常設事務局をコロンボ（セイロン）に設置することが決定された（一九六一年一月に開設）。さらに、一九六一年三月二八日から三一日までの東京における緊急大会を経て、第二回アジア・アフリカ作家会議（第二回大会）が一九六二年二月一二日から一六日にかけてカイロで開催された。

第二回大会の後、アジア・アフリカ作家会議は大きな困難に直面する。インドネシアで開催される予定だった第三

堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（１）

回大会が、中ソ対立、インドネシアにおけるクーデター（一九六五年）などの影響で中止となったのである。さらに、中ソ間の深刻な対立はアジア・アフリカ作家会議の分裂をもたらしした。その経緯は以下のとおりである。

一九六六年三月、中国、インドネシア、セイロンなどがベトナム人民支援のための緊急大会を北京で開催することを常設書記局会議に提案した。一〇カ国の構成国の内、ソ連、インド、アラブ連合をのぞく七カ国が賛成したため、常設書記局は正式に緊急大会の開催を発表した。他方で、緊急大会に反対するアラブ連合のユーゼフ・エル・セバイは六月一日と二〇日に中国に批判的な国を集めてカイロで会議を開催し、カイロに常設書記局を移すことを決定した。^⑦その後中国派（北京書記局）は、ソ連を除名処分にした上で、六月二七日から七月九日にかけて緊急大会を決行した（五三カ国から一六一名が参加）。他方のソ連派（カイロ書記局）は、一九六六年八月三〇日から九月一日にかけて、バクー（ソ連・アゼルバイジャン共和国）でベトナム支援の緊急大会を開催した（ベトナム代表を含む一七カ国が参加）。

こうしてアジア・アフリカ作家会議は中国派（北京書記局）とソ連派（カイロ書記局）に分裂したが、やがて前者は文化大革命の混乱により消滅した。後者は、一九六七年三月二四日から三一日にかけて第三回大会をベイルート（レバノン）で開催した。第三回大会には、アジア、アフリカから四三カ国、ヨーロッパ、ラテン・アメリカからゲストとして一三カ国の作家が参加し（中国は参加せず）、アジア・アフリカ作家会議憲章を採択し、文学賞（ロータス賞）の制定（一九六九年に実現）や機関誌（同年三月より『アジア・アフリカ文学』として刊行、六号より『ロータス』と解題）の創刊を決定した。

この後、運動は軌道に乗り、一九六八年九月二一日から二五日までのタシケントにおける十周年記念集会を経て、

一九七〇年十一月一七日から二〇日にかけてニューデリーで第四回大会が開催された。さらに、一九七三年九月四日から九日にかけてアルマ・アタ（ソ連・カザフ共和国）で第五回大会が、一九七八年一〇月七日よりタシケントで二十周年記念集会在が、一九七九年六月二九日から七月一日にかけてルアンダ（アンゴラ）で第六回大会が、一九八三年九月二六日から一〇月一日にかけてタシケントで第七回大会が、一九八八年一二月八日から一日にかけてチュニス（チュニジア）で第八回大会が開催された。⁸⁾

三 アジア・アフリカ作家会議と日本

日本は、第一回アジア作家会議の時点からこの運動に深く関わった。日本は、全ての大会に代表を送り、常設書記局設置後は常任理事国の一つとなった。かつての帝国主義国だった日本の立場は参加国の中でやや特殊だったが、堀田らの尽力もあり日本は調整役として一定の役割を果たしたようだ。

窓口となる国内組織も生まれた。その契機は、第一回アジア・アフリカ作家会議である。第一回大会に向けて、日本芸家協会、日本ペンクラブ、新日本文学会、日本児童文学者協会、シナリオ作家協会、日本アジア・アフリカ連帯委員会などの団体が共同で日本連絡協議会（委員長は石川達三）を組織し、代表の選出や連絡を担った。第一回大会後、この組織はアジア・アフリカ作家会議日本協議会に発展した（委員長石川達三、事務局長堀田善衛）。

一九六一年三月に東京で開催された緊急大会では、日本協議会は準備のため三三四名の個人会員と九団体を結集した。東京大会は、日本協議会が飛躍的に発展する契機となり、緊急大会後の一九六一年一〇月には『アジア・アフリ

堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（１）

カ通信』が創刊され、一九六二年よりアジア・アフリカ講座も開講された。

だが、中ソ対立とアジア・アフリカ作家会議の分裂は日本協議会にも大きな混乱をもたらした。日本では、中ソ対立において当初中国側に肩入れした日本共産党が一九六六年に中国共産党と決裂したため、状況はより複雑だった。一九六七年六月三〇日、日本協議会は中国の立場を支持する委員の発議により総会を待たずに解散し、「北京派」、「自主独立派」、後述のリエゾン・オフィス（連絡事務所）の三派に分裂した。^⑩

先述したように、一九六七年三月、アジア・アフリカ作家会議はソ連派によりベイルートで第三回大会を開催し再出発を図るが、日本では、日本協議会に代わって新日本文学会内におかれたリエゾン・オフィスがカイロの常設書記局との連絡役を務めた。この状態が第五回大会まで続いた後、一九七四年五月に日本アジア・アフリカ作家会議が設立され（議長野間宏、事務局長堀田善衛）、一九八三年以降は新たに機関誌も発行された。^⑪

アジア・アフリカ作家会議にはどのような作家・文化人が関わったのか。各大会（緊急大会については省略）の日本代表の顔ぶれを見てみよう。第一回アジア作家会議（一九五六年）には、堀田善衛、畑中政春の二名が、第一回アジア・アフリカ作家会議（一九五八年、第一回大会）には、伊藤整（団長）、野間宏（副団長）、加藤周一、三宅艶子、遠藤周作、中川正文、寺田信義の七名が、第二回大会（一九六二年）には、木下順二（団長）、堀田善衛、武田泰淳、依田義賢、藤島宇内、小出正吾、松本正雄、松岡洋子、三宅艶子、佐藤重雄、城山三郎の一名が、第三回大会（一九六七年）には、長谷川四郎（団長）、堀田善衛、針生一郎、北村美憲、鈴木道彦、竹内泰宏、阿部政雄の七名が、第四回大会（一九七〇年）には、堀田善衛（団長）、島尾敏雄、大江健三郎、中蘭英助、高良留美子、竹内泰宏の六名が、第五回大会（一九七三年）には、野間宏（団長）、堀田善衛、大江健三郎、針生一郎、小田実、竹内泰宏、栗原幸夫、

野間光子の八名が、第六回大会（一九七九年）には、堀田善衛、小中陽太郎、芝生瑞和の三名が、第七回大会（一九八三年）には、野間宏、小田実、針生一郎、太田昌国、栗原幸夫の五名が、第八回大会（一九八八年）には、小田実、太田昌国、栗原幸夫の三名が参加した。なお、日本の作家としては、野間宏、堀田善衛、小田実の三名が、それぞれ、一九七三年、七九年、八八年にロータス賞を受賞している。

ところで、日本にとってアジア・アフリカ作家会議とはどのような存在だったのか。一九六〇年代後半まで、日本の一般市民が海外に行く機会は極めて限定されており、このことはアジア・アフリカや共産圏の国々について特に顕著だった。そのため、アジア・アフリカ作家会議は、日本の市民社会が第三世界と結びつく主要な回路の一つとなった。といっても、アジア・アフリカ作家会議における各国の作家間の関係は、市民同士の関係というよりは、国家間、組織間の関係という性格が強かった。だからこそ、アジア・アフリカ作家会議はたびたび国家間の政治によって翻弄された。

こうした限界はあるにせよ、第三世界との交流が極度に制限されていた時代にあつて、日本の作家がアジア・アフリカ作家会議を通じて第三世界の作家と継続的に交流を持った意味は大きい。しかも、一九六〇年代半ばの混乱に目をつぶれば、日本でこの運動が単一の政治党派によってでなく、多様な文化団体や作家個人の結びつきによって推進されたことは高く評価されるべきだろう。

アジア・アフリカ作家会議は、日本とアジアの関係史にも大きな足跡を残した。戦前、日本は台湾、朝鮮を植民地支配し、中国にも權益を広げた。さらに満州事変を契機とする十五年戦争において、日本は占領地を大幅に拡大し、中国を始めとしてアジアの多くの地域を戦争に巻き込んだ。明治以降敗戦に至るまで多くの日本人がアジアを訪れ、

アジアをめぐる様々な言説が生み出されたが、敗戦と植民地喪失により、日本とアジアの関係は（敗戦までのその総括を行わないまま）リセットされた。

一九五〇年代になると、植民地解放戦争の展開、中国における共産主義革命の実現によって、左派陣営や知識人の間にアジアを再評価する気運が生まれた。また、占領と日米安保体制によって反米感情が強まり、日本をアメリカの被支配国として捉え、アメリカ帝国主義からの独立を求める立場からアジアの国々との連帯を求める考え方も提起された。一方で、日本とアジアとの関係は、労働組合や政党など、ほぼ組織間の関係に限定されていた。

こうした状況が大きく変化するのは一九七〇年前後である。ベトナム戦争を契機として過去の植民地支配や侵略戦争、さらに高度成長に伴うアジアへの経済進出について、日本の加害責任を問う視点が生まれた。こうした視点をいち早く提起した団体はベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）であるが、一九七三年にはベ平連のコアメンバーを中心にP A R C（アジア太平洋資料センター）が誕生し、アジアや第三世界の問題に精力的に取り組んだ。また一九七〇年代半ば頃から、国内にP A R Cと共通の問題関心を持つ市民運動が広がり、アジアの運動家との草の根的な交流・連帯も徐々に拡大した。¹³

こうした流れは、アジア・アフリカ作家会議の運動にも影を落としている。第五回大会以降、日本代表としてアジア・アフリカ作家会議の大会に参加した小田実、栗原幸夫、小中陽太郎らはベ平連のコアメンバーであった。また、一九八三年以降発行された日本アジア・アフリカ作家会議の機関誌『季刊a a l a』、『月刊a a l a』の問題関心、論調は、P A R Cやその周辺の運動と大きく重なっている。他方で、古参のメンバーである堀田善衛、野間宏らは、一九七〇年代以降もアジア・アフリカ作家会議の運動にコミットし続けた。

野間宏、堀田善衛、小田実というロータス賞受賞者の顔ぶれが示すように、日本におけるアジア・アフリカ作家会議の運動は、異なる世代の作家、知識人の連携によって展開された。その背景として、堀田善衛ら戦後派世代の作家たちが、植民地対経験、戦争体験をベースとして、アジアとのユニークな交流体験を持ち、またアジアについて先駆的な問題提起を行っていたこと、また後進の世代がこの点を敬意をもって受け入れたことを無視することはできないだろう。¹⁴

四 堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議

堀田善衛は長期にわたってアジア・アフリカ作家会議の運動に深く関わった。堀田はこの運動をめぐる日本人随一の功労者であると同時に、国際的にも草分け（創始者）の一人と目されていた。¹⁵以下、堀田とアジア・アフリカ作家会議の関わりを見てみたい。

先述のとおり、堀田は一九五六年一二月にニューデリーで開催された第一回アジア作家会議に、作家としては唯一の日本人として参加した。¹⁶のみならず、堀田は書記局員として約一ヶ月ほど早く現地入りし、大会の準備にも関わった。続いて堀田は、一九五八年六月にモスクワで開催された第二回アジア作家会議国際準備会議に参加し、大会予定地のタシケントも訪問した（この会議においてアフリカの作家の参加が決まり、第二回アジア作家会議は第一回アジア・アフリカ作家会議（第一回大会）として開催されることになった）。なお、堀田は第一回大会そのものには参加していない。次に堀田は、東京での緊急大会（一九六一年）において事務局長を務め、第二回大会（一九六二年）では

堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（1）

国際準備委員会の委員長を務めた（大会にも参加した）。以後堀田は、第三回大会（一九六七年）、一〇周年記念集会（一九六八年）、第四回大会（一九七〇年）、第五回大会（一九七三年）、二〇周年記念集会（一九七八年）、第六回大会（一九七九年）などに日本代表として参加したほか、常設書記局会議などに何度も出席した。また、一九七九年にはロータス賞を受賞した。

国内の組織においても、堀田は中心的な役割を果たした。堀田は、一九五八年の第一回大会を契機に設立された日本協議会の事務長を一九六六年半ばまで務めた。また、一九七四年に設立された日本アジア・アフリカ作家会議では初代事務局長を務め、一九七九年から八四年までは議長を務めた。

先述のとおり、アジア・アフリカ作家会議は国家間、党派間の対立によって激しく翻弄された。そのため、調整役となった堀田の苦労は並々ならぬものであったようだが、堀田は献身的に働いた。カイロにおける第二回大会に参加した武田泰淳は、アジア・アフリカ作家会議における堀田の働きについて、「堀田君というのは、ひよろひよろしてやるようですけれども、いろいろの外国人をよく知っているのです。（略）欲なしでよく働くから、人に好かれる。ずいぶん思い切ったことを言って、向うが眉をしかめたりするが、それがかえって親愛の念を増すのです。彼はほんとに外交官としても立派なものだと思います」と語っている¹⁷。

これほどまでに、堀田がアジア・アフリカ作家会議の運動に深くコミットしたのはなぜか。堀田は「小国の運命・大国の運命¹⁸」の冒頭で、「この運動は、アジアとアフリカにとってはどうしても必要であり、日本文学もまた、このような現実を知る必要がある、と少々バカ正直というものではないか、と自分でも思いながら、従事するだけはしてきただけものであった」と回想している（第九巻四四五頁）。なお、第一回アジア作家会議の際、堀田が日本代表に選出され

た経緯は明らかでないが、率先して名乗りを上げたわけではないようだ。堀田は当時をふり返り、「ニューデリーで開催される第一回アジア作家会議へ行けという要請を受けて、本当に狼狽したものであった」と回想している（第九巻六六九頁）¹⁹。

ともあれ、堀田が第一回アジア作家会議に日本代表として参加することを承諾し、その後もこの運動にコミットし続けた背景として、敗戦前後の中国体験を認めることは困難ではない²⁰。堀田は、後述の『インドで考えたこと』の冒頭で、第一回アジア作家会議への参加に当たって、それまでのアジアに対する態度を「反省」したと述懐している。元来「西欧文化ファン」であった堀田は、戦中、「アジアのことを知らねばならぬ」という使命感に駆られて中国語を学び、中国に渡って様々な体験を重ね、「『断層』という小説まで書いた」²¹。にもかかわらず、帰国後、「近代西欧に対する一辺倒」の姿勢が蘇り、「アジアのことはまたまた忘れてしまった」（第九巻五一六頁）。なお、「断層」とは堀田の分身である主人公、安野の中国との関わりについて書かれた私小説的な短編小説で、「中国語はとうとうものにならなかったが、日本とヨーロッパしか念頭になかった彼の世界地図は完全に変貌していた」という一節で締めくくられる（第一巻四一〇頁、傍点堀田）。つまり、堀田のアジア・アフリカ作家会議に対するコミットの原点には、中国体験を通じて得られた西欧中心主義に対する自己批判が存在した。

さて、堀田は一九五六年のアジア作家会議への参加を皮切りにアジア・アフリカ作家会議の運動に深く関わるようになり、以後頻繁にアジア・アフリカ諸国やソ連・東ヨーロッパなど共産圏の国々を訪問するようになった²²。アジア・アフリカ作家会議関連の行事に参加するためばかりではない。取材旅行のため、あるいは招待を受けて第三世界や共産圏の国々を訪問することもあった。一九六四年には、キューバ革命蜂起記念祝典に招待されてキューバを訪れてい

堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（一）

る。他方で、一九五七年には中国を再訪し、一九五八年のパリ訪問を皮切りにヨーロッパを訪問する機会も増えた。つまり、一九五六年のアジア作家会議は、堀田にとつて、第三世界のみならず世界に踏み出す第一歩となった。ともあれ、堀田が第三世界と深い関わりを持ち続けたこと、その中核にアジア・アフリカ作家会議が位置していたことに変わりはない。

堀田は、一九五六年における第一回アジア作家会議への参加後、第三世界について多数の著作を発表した。主な著書には以下のようなものがある。

エッセイ・旅行記としては、『インドで考えたこと』（岩波書店、一九五七年）、『後進国の未来像』（新潮社、一九五九年）、『キューバ紀行』（岩波書店、一九六六年）、『小国の運命・大国の運命』（筑摩書房、一九六九年）などがあり、いずれも『堀田善衛全集』第九巻に収録されている。『インドで考えたこと』は、第一回アジア作家会議の際のインド訪問記である。『後進国の未来像』は、第一回アジア・アフリカ作家会議のための国際準備会議への参加を契機として書かれたソ連訪問記および第三世界論である。『キューバ紀行』はキューバ革命蜂起記念祝典に参加した後書かれた、キューバ訪問記およびキューバ革命論である。『小国の運命・大国の運命』には三点の文章が収録されているが、そのメインである前掲の表題作は、プラハの春とソ連による軍事介入を契機として共産主義体制をめぐって書かれた論考である。この論稿では、一九六八年のタシケントにおけるアジア・アフリカ作家会議一〇周年記念集会への参加と、軍事介入後のチェコスロバキア訪問が中心的に扱われている。

小説としては、主に『堀田善衛全集』第三巻所収の『河』（中央公論社、一九五九年）、『堀田善衛全集』第六巻所収の『スフィンクス』（毎日新聞社、一九六五年）、『19階日本横丁』（朝日新聞社、一九七二年）などがある。『河』は堀

田自身の海外における体験を色濃く反映したエッセイ風の作品で、文明論として読むことができる。『スフィックス』は、アルジェリアの植民地解放戦争を扱ったサスペンスタッチの長編小説で、植民地解放戦争をめぐる政治の問題や核の問題が焦点化される。『19階日本横丁』は、ある共産主義国の首都を舞台として、日本の商社から海外に派遣されたビジネスマンを描いた長編小説で、第三世界を含む海外への日本の経済進出が風刺的に描かれている。

このほか、第三世界の問題は堀田の作品の随所に顔をのぞかせている。たとえば、原爆投下に関わったアメリカ人パイロットを主人公とした長編小説『審判』⁽²³⁾には、ビルマ人のダゴン・ダヤという人物が登場し、核についての持論を展開する(堀田は、第一回アジア作家会議の際、同名のビルマ人と知り合った)⁽²⁴⁾。また、戦争のトラウマの問題を扱った長編小説『橋上幻像』⁽²⁵⁾第三部には、ベトナム戦争時の脱走兵である韓国系アメリカ人が登場する。この作品は、堀田の脱走兵援助の経験を下敷きにしたものと推測できる。

五 第三世界と出会う

堀田にとって第三世界が何であったかと言えば、まず未知の世界であったと言うべきだろう。中国をのぞくアジアあるいは第三世界との堀田の最初の出会いを記録した『インドで考えたこと』⁽²⁶⁾には、未知の世界に対する堀田の率直な感想や驚きに満ちた反応が生き生きと記録されている。

先述したように、一九五六年末に堀田は唯一の日本人作家としてニューデリーで開催された第一回アジア作家会議に参加した。堀田はまた、書記局員として本会議の開始よりも約一ヶ月早く現地入りし、中国の韓北屏と通訳の劉慧

堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（一）

琴、ビルマのパラグー、タジキスタン（ソ連）のミール・シャカルと通訳のマリアム夫人、インドのアナンドと寝食を共にしながら会議の準備に当たった。『インドで考えたこと』では、各国代表との交流やインドにおける様々な体験が極めて自由なスタイルで語られている。

敗戦までの日本では「アジア」が饒舌に語られてきたが、堀田はそれらに囚われることなく、自らの感性のみを武器にしてアジアに向き合った。栗原幸夫は、前掲の「A A作家運動の軌跡」において、『インドで考えたこと』という本が、我々に与えた影響は大きかったですよ。（略）『インドで考えたこと』は、我々にアジアを主体的に考える契機をあたえたとおもいます⁽²⁷⁾と述べている。

堀田は同書の中で、日本とインドを始めとするアジアの国々が様々な点で大きく異なっていることを強調している。たとえば堀田は、「ウルドゥ語の詩人」に誘われてピクニックに行き食べ物が入らず閉口したというエピソードや、ボンベイまでの長旅の際、同じコンパートメントに乗り合わせたインド人の医学生から長時間演説を聞かされて辟易したといったエピソードをユーモアを交えて綴り、日本とインドの食文化の違いや人々のメンタリテイの違いを浮かび上がらせた。

またある時、堀田は「リサイタル」に出演することを求められ辞退したが、会場に足を運ぶと、それは音楽の演奏会ではなく詩の朗誦会であった。堀田は、老幼男女が集まり、吟遊詩人のような老人の朗誦に聞き入るデリーの裏町の情景にも触れながら、古典や民衆と乖離してしまっている日本の現代文学とインドの文学の差異を指摘している。

言語のあり方も異なっている。堀田は、第一回アジア作家会議の分科会「作家とその職業」において、議長として各国の状況について報告を求めたところ、「インド内の十七カ語の代表」がそれぞれ発言することを主張して閉口した

という。だが堀田は、セイロン、パキスタン、ソ連なども多言語の国家であることを思い起こし、「日本のように、一カ語だけで全国はなしの通じる国は、地球の上では、むしろ少数に属するのだ」という認識に至る（第九卷六三頁）。

また、堀田はインドの自然環境の過酷さを強調する。朝晩の寒暖の差、「一切の生き物を焼き枯らす」ような日光の強さ、「半砂漠の飢え乾いた土地」等々。堀田によると、デカン高原では、樹木は自然に「生えてくる」ことはなく、畑の作物の「背丈は低く、穂数は少く、ひよろひよろと頼りなく、菜の花にしても満面咲きほこるというにはほど遠い」（第九卷四五頁、傍点堀田）。堀田は、「自然が、どんなにまで過酷でありうるか。それはもう、自然がほとんど人間となれあっている日本島では想像出来ない」（第九卷四三頁）と嘆息する。

さらに、堀田はインドの総体について違和感を表明する。堀田は、「自分の知性乃至感性の幅だけではどうにもとらまえないほどの広さ、始末におえぬ猥雑さというところまでときとして行くと思受けられる複雑さ、あるいは時間と能率にかかわるもの一切の、どうしようもないのろくささ加減に対する苛立ち、またそれが自分のなかに進入して来ることのやりきれなさ」に、「ときどきヒステリー気味になる自分を見出した」と告白する（第九卷五二―五三頁）。堀田は、自身の認識の枠組みがインドを理解する上で全く役に立たないことを痛感し、フォースターの小説『インドへの道』においてイギリス人のフィールディングがインドからヨーロッパに戻った時に発した言葉、「地中海は人間の規矩だ」をしみじみと思い起こす。

ただし堀田は、フィールディングの言葉に対する共感を、「果してとことんまでおれ自身の判断であるのかいな」と問い返している（第九卷五五―五六頁）。同時に堀田は、西洋化による「皮相上滑り」（漱石）の近代化が日本をアジアから切り離したのではないかと問いかける。堀田は、「古代史上代史的な秩序」において日本人の祖先がアジアの文

明に学び、アジアの文明を取り入れたことを思い起こし、「近代史現代史的な秩序」におけるアジアの欠落を反省する（第九卷四八―四九頁）。堀田は次のように述べている。

アジアは、われわれからおっこちてしまったのである。しかし、まるでおっこちてしまったわけではあるまい。まだ遅くはないであろう。ベンチに坐つていて、私は、たとえば足のない人が、手術などで切りおとしてなくなつてしまったその足が疼くという、あの氣持を味つた（第九卷四九頁）。

ただし、日本のみがアジアから孤立しているというわけではない。堀田は第一回アジア作家会議に携わった書記局員間のコミュニケーションについて、「この七人の文学者は、森羅万象について話しても、文学についてだけは話さぬという奇々怪々な結果になった」（第九卷一九頁）と報告する。その理由は互いの文学について知識がないからである。堀田は、『インドで考えたこと』第二章に「アジアがアジアをなんにも知らない」というタイトルを付けている。しかも堀田は、西欧の作家の場合は互いの文学をよく知っていること、のみならずアジアの作家も西欧の文学については知識を持ち、議論が成立することの非対称性も問題にしている。

堀田は、最初のインド滞在を通じて、脱亜入欧型の日本の近代化を反省すると共に、西洋の文化的ヘゲモニーの下で、アジア諸国が相互に分断されている状況について認識を深めた。以後の堀田のアジア・アフリカ作家会議に対するコミットは、日本と第三世界の国々が、また第三世界の国々がお互いに自律的な関係を築くための真摯な努力であったと言えるだろう。

六 「後進国」としての第三世界

『インドから考える』において、堀田は「他国の標準で云えば、インドという国は、まず国というものではない」と述べる。というのも、インドでは、言語、民族、皮膚の色、体つき、宗教、風俗習慣、気候、風土など全てが著しく多様（「バラバラでメチャメチャ」）でまとまりがないためだ。では、インドという国家の統一性を保証するものは何か。堀田は、「このバラバラでメチャメチャな現実を統一しているものは、結局、民族独立、経済建設、民衆の仕合せ、つまりインドの未来が、インドを統一しているのである」と述べる。インドだけではない。堀田は、「新興国とは何かといえば、それはその国の過去というよりも、むしろ未来がその国の存在を保証しているということになるだろう」とも述べている（第九卷六二頁、傍点堀田）。

この観点は『後進国の未来像』にも引き継がれている。同書の冒頭で、堀田は、モスクワにおける第二回アジア作家会議（第一回アジア・アフリカ作家会議）国際準備会議の帰路における体験を紹介する。ペイルート空港でのこと、バラライカを抱えた堀田のところに知らぬアメリカ人がやってきてソ連批判を始めた。堀田が、未来に希望を託すソ連の友人について話すと、アメリカ人は「未来」を持ち出すことで都合の悪い現実を正当化しようとする共産主義者の論法を批判し始めた。それに対して、堀田は次のように反論した。

あの国は巨大な後進国であつたし、いまもそういう部分を多大にかかえこんでいる。そういう国の人民が未来に

堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（1）

希望をかけるのは当然であって、なにか欠点を指摘された場合に、フューチャユア未来にその克服のための希望をかけ、またそれが出来るという自信を、革命後四十年でやつと持つことが出来て来たということは、理解すべき事柄ではなからうか（第九卷二四一頁）

さらに堀田は、「ソヴェトとアジアやアフリカの後進地域とをこちやまぜにしまつてまくしたてた」（第九卷二四二頁）。

アジアやこの中近東には、古い国が沢山にある。けれども、それは歴史が古いだけのことであつて、現実には後進国である。（略）国の歴史は古いけれども、人民が望み見ているもの、それによつてそれぞれの現代史にリアリティを与えているものは、歴史の古さではなくて、むしろフューチャユア未来なのだ。だから、フューチャユア未来と彼等が言うからと言つて軽蔑すべきではないであらう、そうは思わないか（第九卷二四二—二四三頁）

堀田は、第三世界を「後進国」として、「グ未来」という信仰（第九卷二四〇頁）に生きる国として捉える。⁽²⁸⁾ また、堀田はソ連、中国に代表される共産主義国についても、「後進国」として捉えている。⁽²⁹⁾ 堀田は、『後進国の未来像』において、敗戦前後の中国生活、解放後の中国訪問、一九五八年のソヴィエト訪問の際、「つねに、なんというこれは後進国であらうか、という入組んだ感情を捨離することが出来なかつた」と告白している（第九卷三〇五頁）。

もちろん、こうした理解は決して珍しいものではない。当時多くの論者が後進国と共産主義の親和性を指摘してい

た。たとえば加藤周一は、タシケントにおける第一回アジア・アフリカ作家会議のための国際準備委員会に出席した後、『ウズベック・クロアチア・ケララ紀行——社会主義の三つの顔』（岩波書店、一九五九年）を上梓しているが、その冒頭部分で、社会主義革命は資本主義的発展の遅れた地域で発生したこと、第二次大戦後社会主義への関心が後進国・低開発国で高まったことを指摘している。

堀田は、共産主義国を含めて「後進国」の「未来」という信仰⁽³⁰⁾に対して深い同情を示す。実際のところ、堀田は第三世界の明るい未来を素朴に信じていたわけではないが、帝国主義の暴力に抵抗し、民主的な国家を自力で建設しようとする第三世界の人々に深く共感した。その背景として、堀田が、敗戦前後の中国滞在およびアジア・アフリカ作家会議の運動を通じて、帝国主義が被支配国にもたらす破壊的な影響を目の当たりにする一方、自国の政治に情熱的にコミットする人々と交流したことが指摘できる。堀田による「後進国の未来」に対する支持は、堀田が直接関わりを持った人々への深い同情と共感を伴うものだった。他方で、堀田は、先進国の未来に対して行き詰まりを感じていたからこそ「後進国」に期待を寄せた面もある。

ところで、第三世界の「未来信仰」に対する堀田の共感を最もストレートに示した作品に『河』がある。この小説は、堀田の分身である語り手の「私」が、カイロ、上海、パリ、タシケント、モスクワなど様々な場所を訪れ、その印象を自由に語るエッセイ風の作品である。発表当時、『河』の評判は芳しくなかったようだが、一九六〇年代にアジア・アフリカ人民連帯会議の国際書記局（カイロ）で働いた北沢洋子は、この作品を読んで第三世界への想いが強まったと証言している。⁽³¹⁾

さて、タイトルが示すとおり、『河』には、ナイル河、黄河、揚子江、セーヌ河、ユーコン河、メコン河、インダス

河、チグリス河、ユーフラテス河、モスクワ河、ザラフシャン河、シルダリア河、アムダリア河、アムール河等々、世界各地の様々な河が登場する。

右に挙げた河の多くがアジア・アフリカあるいはソ連を流れる大河であることに注目されたい。河は「後進国の未来」の象徴である。エジプト人のムルシイは「私」との会話の中で、「大きな河をもった国は、これから発展するのだ。ミシシッピをもったアメリカ、アマゾンのあるブラジル、みなこれからだ。セーヌ河なんてものは、あれは河じゃない。ただの溝だ」と断言する（第三巻五九五頁）。

だが、河はアジア・アフリカおよびソ連の過酷な自然条件の一部でもある。

すべて河というやつは、どこでどうもつれたのか、ときつほぐれつめちやめちやに、えもいわれず勝手放題、あちらでただ洩り、こちらを水びだしということになって流れているものであった（第三巻六三一頁）。

そして一度氾濫すれば、人間の労苦を無化し、甚大な被害をもたらす。第三世界において、「河は神であり、運命である」（第三巻六三二頁）。

他方で、パリを流れるセーヌ河は、「おとなしくやさしく、ほとんど人工的といいたくなるようなふうで優雅に流れて」と描写される（第三巻六二三頁）。なお、日本の河も、「およそのところ、人間の統制に服している」。日本において人間の河との格闘は今日も続いているが、すでに堤防が築かれ、「われわれの河は既に、運命、ではなくなっている」（第三巻六三二頁）。

右の日本の河をめぐる記述が示唆するように、治水灌漑事業の進展の度合いは、その国の近代化の指標である。つまり、第三世界において河が依然として「運命」であるということは、自然条件の規定を度外視するならば、その国の「後進性」を示す。そして、河を技術を用いて人間の支配下におくことは、実質的にも象徴的にも国家を近代化する意味を持つ。堀田は『河』において、「後進国」の人々が河を統御するため懸命に取り組む姿、即ち「世界の各地の人々がそれぞれの仕合わせのために、あるいは長江に橋をかけ、アスワンにダムを築き、またシベリアの大河を逆流させようとしている」(第三卷六五二頁)姿に希望を見出す。

特に注目されているのは、揚子江の洪水対策である。『河』によると、一九五四年に揚子江で洪水が発生したとき、中国の民衆は堤防を補強すべく献身的に働いた。全国から学生、兵士、農民が集まり、「人海戦術」を展開して機械の不足を補った。滑りやすい場所では自分の衣服を泥の上に置き、それを踏んで作業を行った。

このような中国人の姿は第三世界の人々を勇気づけ鼓舞する意味を持った。ムルシイは、洪水対策に従事する中国人の姿から「古い伝統的なエネルギー」を呼び覚まされたと述べる。

人海戦術、と人は言うが、おれはわれわれのピラミッド建設もこんなだったか、と思った。われわれアラブ人が、ヨーロッパの近代文明に氣をとられ、砂漠のなかに忘れかけてしまつて、外国から来る観光客だけが覚えていくれるピラミッドや神殿のことを、あそこでおれは思い出した。わたわれもまた、自分自身の歴史や伝統を観光客にまかせてしまうという間違いを犯して来たことに氣がついた(第三卷五九六頁)

当時、第三世界の人々にとって中国は模範であり未来に対する希望であった。ムルシイだけではない。『河』には、フランスに対する国家反逆罪で死刑判決を受け、エジプトに亡命申請をしているカメルーン人エコロが、「今度おれは、よほどカイロじゃなくて中国へ亡命しようか、と思った、中国は後進国の解放と建設の、本当の先輩だ」と述べる場面がある（第三巻五九三頁）。「私」は、中国に亡命しているチリ人の革命家夫妻のことを思い起こす。

他方、『キューバ紀行』では、キューバにおける革命の成就と国家建設が極めて肯定的に描かれる。同書で堀田が強調するのは、キューバの国民に対するカストロら指導者たちの献身的な姿勢と彼らに対する国民の大きな支持である。とりわけ堀田は、キューバの外国資本への隷属とそこから脱却するための懸命の努力に目を向けている。

なお、陽性のキューバ人の気質は堀田の肌合っていたようで、同書において堀田は、現地の人々との交流をユーモアを交えて明るく描いている。また堀田は、外国映画の上映が自由化されている点など、共産主義国家としてのキューバの柔軟で寛容な姿勢を好意的に捉えている。『キューバ紀行』に描かれたキューバは、教条主義的・官僚主義的でない、オルタナティブな社会主義社会の姿を示している。このテーマは、後に『小国の運命・大国の運命』でより詳しく展開されるだろう。

七 第三世界と日本

ところで、堀田はアジア・アフリカ作家会議における日本のポジションをどう捉えていたのだろうか。言うまでもなく日本は地理的にはアジアに属するが、かつての帝国主義国家である。反植民地主義・反帝国主義を旗印とし、過

去に植民地支配を受けた（あるいは、植民地支配を受けている）国々が圧倒的多数を占めていたアジア・アフリカ作家会議において、日本は例外的な存在であった。他方で、日米安保体制は日本の左派知識人の間に日本がアメリカの半植民地であるという認識を生んだ。そのため、当初アジア・アフリカ作家会議は日本が被抑圧国の立場から第三世界の国々との連帯をめざす運動としても捉えられていた。

一九五八年にタシケントで開催された第一回大会において、野間宏は、「国際緊張の作家に及ぼした緊張」というタイトルで講演を行い、「私たち日本人は、アジア、アフリカの各民族の独立と、現にたたかわれている民族独立のたたかいから、大きな精神的援助を得ています。民族の独立こそは、私たち日本人にとってもまた、大きな共通の課題であるからであります」と述べた³³。また、一九六一年三月の東京における緊急会議の開催は、前年の安保闘争をふまえて、「独立のためにたたかいつている日本の作家と日本人民にアジア・アフリカ作家会議が協力の手をさしのべること」を求めた日本代表の要請に基づくものだった³⁴。東京大会における日本代表報告において、中野重治は、安保闘争をアジア・アフリカの反帝国主義闘争、反植民地主義闘争の一部として位置づけている³⁵。

もともと、中野は同じ報告の中で、戦前の日本が「アジアの隣人にたいして侵略者、加害者」であったこと、朝鮮戦争において日本が「共犯者的役割」を果たしたこと、米軍基地が日本の周辺国に対するアメリカの干渉に深く関わっていることについても明快に述べている³⁶。他方で、東京大会に参加した鈴木道彦は、「A・A作家会議における日本代表はいささか場ちがいであり、むしろ西独の代表とでも会議をひらいた方がよいのではないか、という皮肉な意見」も提起されたと証言している³⁷。一九六七年における第三回大会における日本代表（長谷川四郎）の演説では、かつて植民地支配を行っていた日本の「アジアにおける特殊な状態」が強調されている³⁸。このように、アジア・アフリカ作

作家会議における日本の立場は、地理的にはアジアに属し、日米安保体制に基づいて米国の軍事的抑圧を受けつつも、かつての帝国主義国であり、第三世界でも共産主義国でもないという曖昧さを含むものだった。

では、堀田はどのような認識を持っていたのか。堀田は、ほぼ一貫して、アジア・アフリカ作家会議における日本の例外的な立場を強調している。堀田は第一回アジア作家会議の時点で日本を先進国として捉えていた。『インドで考えたこと』において、堀田は同時代の日本の「猛烈な生産と消費」を他のアジア諸国と対比し、「いまだに工業の段階に到達していないアジアの国々から見れば、怖ろしくなるようなものである」と評している（第九卷三〇頁）。また、「後進国の未来像」では、日本は「未来」^{フューチャー}に関して、「アメリカは別として、西欧とパラレルな状況にあるかもしれない」と述べる（第九卷二五二頁）。つまり、半ば近代化を遂げた日本はヨーロッパと同様文明の行き詰まりに直面しており、第三世界の国々と違って「未来」に夢を託すことができない。

他方で、第五節でも言及したとおり、堀田はアジアの一角を占める日本が欧米と同一であり得ないことを深く認識していた。堀田は、第三世界の人々が、明治以後脱亜論的な立場に立った日本に対して向ける批判的な視線を意識せざるを得なかった。『インドで考えたこと』には、農村で出会った老人から次のような言葉を投げかけられる場面がある。

日露戦争以来、日本はわれわれの独立への夢のなかに位置をもっていた。しかし、日本は奇妙な国だ。日露戦争に勝って、われわれを鼓舞したかと思うと、われわれアジアの敵である英国帝国主義と同盟を結び、アジアを裏切った。工場建設をどしどし推し進めてわれわれの眼をみはらせてくれた。が同時に、その工業力を、英国帝国主義と

同じように使い、英国がインドに要求したとおなじような、タナカ・メモリアル（対支二十一カ条要求のこと）を中国につきつけた。つい近頃では、米英の帝国主義を叩きつぶし、植民地解放をやろうとしてくれた。が、それと同時に、その旧植民地を日本帝国主義の植民地としようとした。不思議な国だ。戦後には、アジアで英国支配の肩替りをしようとするアメリカと軍事同盟を結んだ。つくづく不思議な国だ（第九卷三三—三四頁）

この発言に対して、堀田は次のように答える。

われわれの国が、アジアの眼からみた場合、つねにそういう二重性を帯びていたことを、われわれも承知している。それはかなり長い時間にわたった。しかし、現在、この歴史的な習性ともなっている二重性からぬけ出さなければならぬと気付き、そのために努力をしている人がたくさんいるということを私はあたなに告げたい（第九卷三四頁）

他方で堀田は、第三世界の人々が日本に対して示す連帯の姿勢にも言及している。たとえば堀田は、インドがサンフランシスコ講和会議を欠席した理由の一つは、沖縄を含む「日本の全主権の恢復」を主張し、それが受け入れられなかったためであると指摘している（第九卷一〇〇頁）³⁹。また堀田は、広島、長崎、ビキニにおける日本の被爆体験について、第三世界の人々が示した気遣い、罪悪感、連帯意識に感銘を受けたと随所で述べている。

また、アジアに対する加害責任については、堀田は侵略戦争をめぐる日本の責任を強く意識していた。堀田は第一

回アジア作家会議の分科会において日本の戦争責任に言及し拍手喝采を受けたと報告している。⁽⁴⁰⁾

なお、日本国内では、ベトナム反戦運動を契機としてアジアに対する日本の加害責任が問題化され始めるが、やがて日本の経済進出がもたらす資源の収奪、労働力の搾取、自然破壊などについても議論されるようになった。堀田の著作の中で、日本の第三世界に対する経済的な搾取を比較的詳しく取り上げた作品としては、『19階日本横丁』がある。

この作品は、「北方の寒い広大な国の首都」を舞台として、海外で働く日本のビジネスマンを喜劇的・風刺的に描いた長編小説である。物語は、二九階建ての「巨大ホテル」の一九階にある木村宅におけるホームパーティーの場面から始まる。木村は日本のある商社の駐在員で、招待客の多くも同じ商社の駐在員とその家族である。といっても皆がこの首都に常駐しているわけではなく、日本の工業製品の展示会を開催するため、世界各地（パリ、ロンドン、カルカッタ、シンガポールなど）に派遣されている社員たちが一時的にこの首都に集められたという設定となっている。

堀田は、外国生活になじめず日本人同士で群れ、愚痴をこぼしあう日本のビジネスマンの悲喜劇をユーモラスな筆致で描いている。同時に堀田は、「ラーメンからミサイルまで」取引きする総合商社が象徴する日本企業の貪欲な利益追求の姿勢と日本人の底なしの消費欲についても、批判的に描き出している。

たとえば登場人物同士の会話の中で、日本はししやもをアイスランドから輸入し、正月のしめ縄に使う藁を台湾から輸入していることが語られる。また、日本企業はアフリカに埋蔵されている各種の鉱物資源の取引にも深く関わっている。

資源に関して、日本はハイエナである（第六巻五三一頁）。

他方で、日本企業は資源を乱獲して第三世界の自然環境を破壊し、プラント輸出により公害をまき散らしている。戦争さえもビジネスの手段として利用する。シンガポールに駐在する山田伝六は、ベトナム戦争下のサイゴンに出張し、鉄の再利用を目的として、破損した戦車、トラックなどの回収に関わった経験を持っている。

もともと、この作品に登場するビジネスマンは先進国による第三世界の搾取について無批判であるというわけではない。普段は会社の命令に肅々と従っている彼らは、内心疑問や罪悪感を感じている。伝六は次のように煩悶する。

経済進出、経済援助、資源開発、開発協力……。

その名やよし、である。

しかし、進出、援助、開発、協力というものが、日本人の側での一方的な思い込みであるにすぎなくて、先方様が、もし万一に、まったく違った認識をもっていたとしたら、どうなるか？（第六巻四八一頁）

八 おわりに

堀田善衛は、一九五六年に開催された第一回アジア作家会議を皮切りに、長期にわたってアジア・アフリカ作家会議の運動に関わった。この運動を通じて、堀田は頻繁に第三世界の国々を訪れ、多くの人々と交流した。堀田にとって第三世界は未知の世界であり、時として理解の範囲を超えてもいたが、堀田は既存のイメージに囚われることなく第三世界の現実と向き合った。

堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（１）

アジア・アフリカ作家会議における日本の位置は特殊であった。日本はアジアの一国であり、被爆国であり、独立後も米軍の駐留を受け続けたが、かつての帝国主義国でもあり、先進国でもあった。したがって、日本の代表が第三世界の人々から信頼を得るためには、国際社会の状況をめぐる適切な理解と、ある種のバランス感覚が必要であったろう。堀田は多面性を持つ日本の立場をふまえながら、第三世界の国々と柔軟に関わった。

堀田は第三世界の国々が帝国主義・植民地主義の暴力から脱却し、主体的に近代国家の建設を行うことを心から支持した。敗戦前後の中国体験とほかならぬアジア・アフリカ作家会議を通じた第三世界との関わりは、第三世界についての堀田の理解を支えた。だが、アジア・アフリカ作家会議が反帝国主義・反植民地主義の理念を前面に据え、過度に政治に傾斜したことを、堀田は窮屈にも感じていたようだ。しかも、アジア・アフリカ作家会議は、中ソ対立を始めた第三世界陣営内部の政治によって激しく翻弄された。堀田は文学運動が教条的なスローガンに収斂する傾向や、文学運動を政治的に引き回そうとする傾向に反発した。他方で、堀田は政治に対して背を向ける逃避としての文学主義にも抗った。

本稿の続編に当たる「アジア・アフリカ作家会議（２）」では、アジア・アフリカ作家会議における政治と文学の関わりについて、また政治の暴力の問題について、堀田がどのような考察や思想化を行ったのか、またアジア・アフリカ作家会議の運動の中で堀田がどのように振る舞ったのかを検討したい。

注

（１） 本稿において、堀田善衛の著作の引用は、原則として『堀田善衛全集』全一六巻、筑摩書房、一九九三―一九九四年に依拠する。引用

を行う際は、本文中に巻数、頁数を記載する。

- (2) アジア・アフリカ作家会議の歩みについては、栗原幸夫「A・A作家運動小史」、『歴史の道標から』れんが書房新社、一九八九年（初出は、『新日本文学』一九七三年八月号、『季刊aalaa』第二号、一九八三年二月、『信濃毎日新聞』一九八九年一月九、一〇日号）を参照。天野恵一、水島たかし、田浪亜央江による栗原幸夫へのインタビュー、『A・A作家運動の軌跡』、『未来形の過去から——無党の運動論に向けて』インパクト出版会、二〇〇六年も参考になる。このほか、アジア・アフリカ作家会議日本協議会の機関誌（『アジア・アフリカ通信』）や会報、日本アジア・アフリカ作家会議の機関誌（『季刊aalaa』、『月刊aalaa』）、『新日本文学』、『文化評論』、その他の雑誌、新聞に、関連の記事が多数掲載されている。

- (3) アジア・アフリカ会議については、岡倉古志郎編『バンドン会議と五〇年代のアジア』、大東文化大学東洋研究所、一九八六年を参照。

- (4) 一九五五年以降、アジア連帯を推進するため多数の国際機構・組織が設立された。岡倉古志郎ほか『アジア・アフリカ講座』第四巻「A・A研究のために」勁草書房、一九六六年参照。なお、アジア諸国民会議後に各国に組織された人民連帯委員会を中心として、一九五七年二月にカイロでアジア人民連帯会議が開催され、その延長線上でアジア・アフリカ人民連帯機構が組織された。日本においても、一九五五年一〇月に日本アジア連帯委員会が組織され（一九五八年二月にアジア・アフリカ連帯委員会と改称）、一九五七年八月より機関誌『アジア・アフリカ』を発行した。

- (5) 堀田によると、第一回アジア作家会議には、アジア諸国一五カ国から一五六名が参加し、西欧諸国からオブザーバーとして一七名が参加した。『第一回アジア作家会議に出席して』『サンケイ』一九五七年一月一二日号。『堀田善衛全集』第一四巻所収。

- (6) 一九六五年にアルジェで開催が予定されていた第二回アジア・アフリカ会議も、アルジェリアとインドネシアで発生したクーデター、印パ紛争、中ソ対立などにより中止となった。

- (7) 以上は、霜多正次・窪田精「アジア・アフリカ作家会議とベトナム人民支援のたたかい」、『文化評論』第六〇号、一九六六年一〇月号参照。なお、六月七日と一〇日には北京で常設書記局会議が開催された。『会報（アジア・アフリカ作家会議日本協議会）』第六号、一九六六年六月、一頁。

- (8) アジア・アフリカ作家会議はソ連崩壊前後に自然消滅したようだ。『ロータス』は一九八八年発行の第六〇号で終刊した。

堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（1）

- （9） 東京大会を前にして、アジア・アフリカ作家会議日本協議会は『二〇億民族の発言——A A作家会議東京大会を迎えて』を発行した。東京大会の記録は、『新日本文学』一九六一年五月号に掲載されている。
- （10） 一九六四年二月発行の一九・二〇号（合併号）をもって終刊した。
- （11） 「自主独立派」は解散後もアジア・アフリカ作家会議日本協議会を名乗り、一九六七年一月には『アジア・アフリカ通信』を発行した（神奈川近代文学館所蔵）。
- （12） 『季刊a a l a』全一一号（一九八三年一月～一九八五年一〇月）、後続雑誌『月刊a a l a』は第一二号（一九八五年十二月）より刊行（終刊時期不明）。一九九三年五月には、新たに『季刊a a l a』が創刊されたが、その時点で国外の運動団体は消滅していた。日本アジア・アフリカ作家会議の活動については、前掲栗原「アジア・アフリカ作家運動小史」参照。
- （13） 拙稿「アジアの女たちの会とその周辺——国際連帯の観点から」安田常雄編『シリーズ 戦後日本社会の歴史』第三巻、岩波書店、二〇一二年。
- （14） アジア・アフリカ作家会議の運動には、戦前・戦中にアジアを訪れた（アジアで生活した）体験を持ち、かつそれを批判的な視点で捉えた作家が少なからず参加した。たとえば、『アジア・アフリカ通信』第三号（一九六一年十二月）には、植民地生まれの尾崎秀樹、小林勝が日本の植民地支配の加害責任に言及した文章を寄せている。
- （15） 「小国の運命・大国の運命」『朝日ジャーナル』一九六九年一月一九日号から六月一五日号まで連載。『堀田善衛全集』第九巻、四四五頁。
- （16） 第一回アジア作家会議に堀田と共に日本代表として参加した畑中政春は、レッドパージにより朝日新聞を追われたジャーナリストである。畑中は、日朝友好や原水禁の運動に深くコミットし、日本アジア連帯委員会の結成にも関わった。畑中政春『平和の論理と統一戦線——平和運動にかけた三〇年』太平出版社、一九七七年。
- （17） 武田泰淳「植物の根や昆虫の触角のごとく」『アジア・アフリカ通信』第七号、一九六二年四月、一〇頁。
- （18） 前掲論文。
- （19） 「著者あとがき——先進国の後進性」『堀田善衛全集』第九巻。
- （20） 『堀田善衛全集』第三巻の「著者あとがき——無常観の克服」では、「筆者がアジア・アフリカ作家会議の運動に従事しはじめたの

は、おそらく戦中戦後の上海での生活によって、いわば西欧一辺倒であったかもしれないが、百八十度とは言わないまでも、相当程度に転廻する必要を感じたことから発していたであろうと思われる」と述べている（六五八頁）。

(21) 『改造』一九五二年二月号、『堀田善衛全集』第一巻所収。

(22) 堀田の海外渡航歴については、財団法人神奈川文学振興会・スタジオジブリ編『堀田善衛展——スタジオジブリが描く乱世。』県立神奈川近代文学館・財団法人神奈川文学振興会、二〇〇八年所収の「堀田善衛年譜」を参照。

(23) 『世界』一九六〇年一月号から一九六三年三月号まで連載。『堀田善衛全集』第五巻所収。

(24) 『審判』については、拙稿「堀田善衛『審判』論——原爆投下の罪と裁き」、『北海道大学文学研究科紀要』第一四三号、二〇一四年七月参照。

(25) 新潮社、一九七〇年。『堀田善衛全集』第七巻所収。

(26) 『インドで考えたこと』の主なテーマの一つに、無常観および虚無との格闘がある（竹内泰宏「堀田善衛とアジア——文化創造の根源を求めて」、『日本アジア・アフリカ作家会議編『戦後文学とアジア』毎日新聞社、一九七八年、牧梶郎「無常観とアジア的虚無——『インドで考えたこと』とその前後」中野信子ほか『堀田善衛——その文学と思想』同時代社、二〇〇一年）。このテーマは堀田の思想の中で重要な位置を占めるが、第三世界論よりも日本論の文脈で論じる方が相応しいと思われるため、本稿では扱わない。

(27) 二〇四頁。なお、一九六一年には、小田実が『何でも見てやろう』を河出書房新社より上梓している。同書は、小田のフルブライト奨学生としてのハーバード大学における留学生生活とバックパッカーとしての世界一周旅行を綴った旅行記である。西洋人の若者と対等な立場で付き合い、既存のイメージに囚われずに世界（とくにアメリカ社会）を観察する小田の姿勢は、当時としては極めて斬新だった。堀田と小田の世代は異なるが、『インドで考えたこと』と『何でもみてやろう』は好一対をなす著作と言えるだろう。

(28) 堀田が第三世界を「後進国」と同一視している点に、当時の知識人に広く共有されていた進歩史観を見て取ることは困難ではないだろう。

(29) もっとも、堀田は第三世界と共産主義国を同一視していたわけではない。また堀田は、ソ連および中国を共産主義国一般に還元できない大国としても捉えていた。この点については、本稿の続編である「堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（2）」で論じる予定である。

堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（1）

- （30） 前掲「小国の運命・大国の運命」では、堀田は第三世界主義が先進諸国で支持を集めている背景として、先進諸国の閉塞状況を見て取っている。
- （31） 「著者あとがき——無常観の克服」『堀田善衛全集』第三巻。
- （32） 『私のなかのアフリカ』朝日新聞社、一九七九年、二六頁。
- （33） 野間宏「国際緊張の作家に及ぼした影響——第二回アジア・アフリカ作家会議報告」『新日本文学』一九五八年一月号、一四二頁。
- なお、同報告のタイトル中の「第二回アジア・アフリカ作家会議」は、「第一回アジア・アフリカ作家会議」が正しい（第一回アジア・アフリカ作家会議は第一回アジア作家会議に次ぐ二度目の大会であったため、当初、第二回アジア・アフリカ作家会議と呼ばれていたのかもしれない）。
- （34） 野間宏「アジア・アフリカ作家会議第一回理事国会議の報告」『新日本文学』一九六二年三月号、八頁。
- （35） 中野重治「日本代表報告（各国代表報告四）」『新日本文学』一九六一年五月号、一七八頁。
- （36） 同、一七六—一七七頁。
- （37） 鈴木道彦「コンゴ、カメルーン、アルジェリア（A・A作家代表が語るアジア・アフリカの文化と政治）」『新日本文学』一九六一年五月号、一八一—一九九頁。
- （38） 長谷川四郎「日本代表団の演説——付・バイロート雑感」『新日本文学』一九六七年七月号。
- （39） サンフランシスコ講和会議、サンフランシスコ平和条約をめぐるインドの政策とその背景については、中村麗衣「日印平和条約とインド外交」『史論』第五六号、二〇〇三年参照。
- （40） 「胎動するアジア——第一回アジア作家会議に出席して」『文学』一九五七年五月号、『堀田善衛全集』第一四巻所収。ただし堀田は、外交辞令的な印象を与えることを恐れて、公の場で日本の戦争責任について語ることを好まなかったようだ。日本の戦争責任をめぐる堀田の認識については中国との関わりを論じる際に検討する予定である。